北星学園大学文学部北星論集第55巻第１号（通巻第66号）（2017年９月）・抜刷

私語抑制に関する実証的研究

――名札提示効果の検証を中心として――

濱　　保　久

私語抑制に関する実証的研究
――名札提示効果の検証を中心として――

濱　　保　久
Yasuhisa HAMA

目次

1．はじめに
2．先行研究
3．目的
4．方法
5．結果・考察
6．まとめ
7．謝辞
8．引用文献

［Abstract］
An Empirical Study on Controlling Students' Whispering in Class

This study showed the effects of placing one's nameplate on the desk during class on controlling students' whispering and students' consciousness of controlling whispering. Students were divided into two groups in accordance with the frequency of placing their nameplates on the desk in class: students with higher frequency of placing their nameplates and students with lower frequency of placing their nameplates. Comparative verification of the two groups showed a significant difference in students' consciousness of controlling whispering. Notably, students with higher frequency of placing their nameplates on the desk tended to consider other students to be conscious of refraining from whispering when they placed their nameplates on the desk. This can be thought to suggest the possibility that students with higher frequency of placing their nameplates on the desk actively do so in expectation of a norm to be established.

はじめに

授業中の私語などを含む迷惑あるいは妨害行為は小中学校における授業崩壊として指摘されてきたが，30年ほど前から大学における講義中の私語がクローズアップされてきた。当初は現場で直面する教員が試行錯誤で策を講じなんとか対応してきたのであるが，全国的に鎮静化に向かうどころか蔓延化の様相を呈してきたことから，教育学や心理学の研究対象として取り上げられるようになった。新堀（1992）は，実践的ノウハウの蓄積と私語の背景にある日本の社会的問題としての研究意義を主張し積極的な研究取り組みを促している。

単位取得および卒業のハードルが日本よりもはるかに高いといわれているアメリカにおいては大学生を対象とした私語研究はほぼ皆無である。Peretti & Johnson（1984）が小学生を対象に行った研究では，女子児童において，親の拒絶的態度が私語を誘発していると報告しているが，日本の大学生の私語にこれを当てはめるのは無理があろう。すなわち，日本の大学における私語は優れて我が国の社

キーワード：授業中の私語抑制，名札提示，規範
Key words：Controlling Students' Whispering, Placing One's Nameplate, Norm

会的問題として捉えなければならないと考える。

先行研究

では，日本の研究者たちは授業中の私語をそもそもどのように定義してきたのか。もっともシンプルな定義は卜部・佐々木（1999）の「授業中に学生同士で交わされる私的な話」であるが，どこまでを「私的な話」ととらえるかについて興味深い研究がある。島田（2002）は，「どのようなおしゃべりを私語とみなすか」について教員と学生を対象とした調査を行い，教員は「授業中に生じるおしゃべりは全て（28.6％）」，「授業を妨げるおしゃべり（35.9％）」，「授業内容に直接関連してないおしゃべり（34.5％）」と回答した一方で，学生は，「授業中に生じるおしゃべりは全て（6.3％）」，「授業を妨げるおしゃべり（39.8％）」，「授業内容に直接関連してないおしゃべり（53.4％）」と回答したと報告している。すなわち，授業中のおしゃべりはすべて私語であるというとらえ方において教員と学生の間に5倍近くの差があるということである。島田は続く質問で，「授業を妨げないおしゃべり」が私語でないと考える理由を学生に訊ねているが，多いほうから順に，「授業の流れをこわさないようにしているから（45.8％）」，「小声でするのでみんなの邪魔にならない（41.0％）」，「授業の雰囲気をこわさないようにしているから（40.3％）」，「先生の話はきちんと聞いているから（35.9％）」，「二言三言でおしゃべりが済むから（32.9％）」，「小声でするので，先生の話の邪魔にならないから（31.9％）」であった。これらの回答に共通しているのは，教員を含めた周囲の人間に迷惑を与えていないからかまわないだろうという考えであるが，話しかけられた相手の迷惑という視点が欠落している。私語の問題は教室環境から議論されることが多いが，実は話しかけられた相手の授業を受ける権利や時間を奪っているという観点からも議論されなければならない。

出口・吉田（2003）は，対人関係の構築を重視する学生は，規範意識の高低に関わらず，授業に無関係な私語を行う傾向があると報告している。また，須藤（1996）は，高校生・専門学校生・大学生を対象に授業中の私語の頻度と友人関係との関連について検討し，その結果，授業中によく私語をしている人は，あまり私語をしていない人に比べ，親密な人間関係を持っており，私語には「対人関係の維持」という機能があると考察している。これらの報告は，つまり，私語が周囲の人に対して迷惑な行為であると認識していたとしても友人関係を維持したいという思いから無下に話しかけを無視するわけにもいかずおしゃべりに引きずりこまれる学生がいることを示唆しているのである。この知見は，出口・吉田（2005）の研究でさらに強化された。社会的スキルが高い者の方が私語をする傾向にあることや，対人関係の適応を高めるために私語をしている可能性が示され，授業中の私語という社会的に望ましくない行為をすると，対人関係の適応が高まるという，矛盾した状況が生まれていることを報告している。

その結果として，わが国の高等教育機関では授業中の私語が蔓延した。島田（2002）は，大学・短大・看護学校の学生を対象に私語に関する質問紙調査を行い，「私語はしたことがない」と回答した者は4.7％しかおらず，「ほとんどの講義でしている（20.3％）」，「いくつかの講義でしている（62.7％）」と，多くの学生が授業中に私語をしている状況を報告している。また同じく，島田（2002）は大学・短大の教師を対象に質問紙調査を行っている。その結果，「自分の講義で私語が発生しているか」という問いに対して，「全く発生していない」と回答した者は16.7％であり，61.6％の教師が「一部の講義で発生」と

回答し，「全部の講義で発生」という回答も21.8％に及んでいた。

このように私語がほぼ日常化している状況ではあるが，しかし，「授業中に私語をしても良い」と学生は必ずしも考えているわけではなく，約７割の学生が「私語はしてはいけない」という意識を持っていると報告する研究もある（岩淵・小牧，1996）。また，藤川・西山（1997）は，短期大学の女子学生を対象に，私語に対する意識について質問紙調査を行い，学生自身が講義中の私語をどのように認知しているかについて，肯定する学生の比率が高かった上位５項目は，「私語は他の学生に迷惑をかけていると思う（89.1％）」，「講義中の先生に対して悪いと思う（87.8％）」，「私語は，その講義を本気で聴いている学生にとって迷惑だ（86.5％）」，「学生の私語は気分が散って講義の内容が理解しにくくなる（61.5％）」，「他の学生に迷惑をかけるので決してすべきものではない（57.5％）」であったことを報告し，いずれの結果も，学生が講義中の私語は良いことではないとはわかっていることを示している。

では，私語をなくすために我々教員はどうすればいいのであろうか。

藤川・西山（1997）は大学生を対象とした調査であがった私語防止への対策の上位５項目は「教師自身がもっと「講義の内容」に工夫をして欲しいと思う（71.7％）」，「教師自身が，もっと「話しぶりや表現」に工夫をして欲しいと思う（69.6％）」，「教師は，私語をしている学生に注意するほうが良い（50.7％）」，「教師はもっと学生の名前を覚える方が良い（48.6％）」，「講義は出来るだけ「小人数」にした方が良い（45.2％）」であったと報告している。すなわち，おしゃべりをする気にさせないような魅力のある内容を上手なやり方で展開してほしいということである。それでも私語が発生したときには授業監督者としての責務をきちんと果たし注意を与えてほしいということである。注意を超えた強権発動として，塚田・佐藤（2006）は，出席カード没収を私語注意に随伴させることで，私語を減少させ授業環境を改善させることができたと報告している。私語が多い学生からは出席カードを没収するとあらかじめ忠告し，実際に行った結果，私語減少に有効であったとした上で，しかし，この方法を適確に実施するには履修者の私語の傾向・特徴を把握しなければならず，適切な監視人材を確保する必要があるという問題点も指摘している。

目的

北星学園大学文学部心理・応用コミュニケーション学科では毎年新入生全員に机の上に置くことができる名札（横6.5センチ，縦23.5センチ）を配布し学科の授業に際してはその名札を机の上に置くよう指導している。定員90名の学科なのでたとえ最後列に着席している学生の名札であっても教壇から読み取ることができる。表向きは，できるだけ早く学生諸君の顔と名前を一致させたいという理由で説明しているが，実は匿名集団意識を崩壊させ一人ひとりが教員から個別的に認識されているという意識を学生諸君にもたせて私語発生を予防しようという隠れた目的を有している。

何年も前から全国的に問題となっている大学の講義中の私語抑制に対してこの名札提示がもつ効果を検証することが本研究の目的である。

方法

提示名札：心理・応用コミュニケーション学科では，建築系フィールド実習の練習課題として２年生が４ミリシナベニアを用いて次の図のような自立式名札を全新入生分作成して

いる。この表面に大きな太文字のフォントで氏名を印刷した透明フィルムを張り付ける。教室最後列に着席している学生の氏名も判読可能である。

被調査者：北星学園大学生92名（男子：33名，女子58名，不明１名）

調査時期：2008年７月17日

調査方法：授業中に調査票を配布し記入させたうえで回収した（有効回答率100%）。

質問項目：授業中に名札を提示している程度（学科の新入生には学科学生だけが受ける講義時には基本的に名札を机上に提示するよう指示しているが必ずしも完全に守られているわけではない），授業中の私語発生程度，授業中に自分が私語を発生させている程度，名札を提示することで自分自身の私語発生が抑制されている程度，名札を提示することで他の学生が私語を抑制していると思われる程度，についてすべて７件法で回答を求めた。

それ以外の質問項目には，高校時代の授業中私語行動や大学入学後の授業態度，交友関係，推測する自分の当該授業科目の成績，着席場所，私語発生場所なども含まれている。

結果・考察

１．名札提示が自分の私語発生に及ぼす効果

まず，「名札をどの程度提示していましたか」という質問（７件法）において１，２，３と回答した被験者を名札提示低群とし，５，６，７と回答した被験者を名札提示高群（以下同様）とした。「あなたはこの授業中にどの程度私語をしていましたか」という質問に対する評定値に基づいてt検定を行ったところ学科専門必修科目においても大学共通科目においても有意な差が認められなかった（$M = 1.56$, $SD = .727$, $M = 1.48$, $SD = .852$, $t[87] = .362$, *n.s.* $M = 2.68$, $SD = 1.64$, $M = 3.00$, $SD = .15$, $t[82] = .791$, *n.s.*）。また，どちらの科目においても両者の間に有意な相関も認められなかった。つまり，事象としての自己の私語発生に対しては名札の提示効果がなかったということになる。そもそも，自己の私語発生程度平均回答値が学科専門科目で1.55（$SD = .93$），大学共通科目で2.93（$SD = 1.53$）と低い値を示していることから，教員による私語コントロールが名札を提示しているかどうかに関わらず全学生に浸透している可能性が考えられる。

２．名札提示が自己の私語抑制意識に及ぼす効果

１．で述べたように，名札提示は事象としての自己の私語発生に有意な効果を示さなかったわけであるが，私語抑制の意識向上に対しては効果があるのかもしれない。そこで，「では，あなた自身は名札を立てることによって授業中に私語をしなくなったと思いますか」という質問（７件法）の回答値に基づいて，名札提示低群と名札提示高群の間でt検定を行ったところ学科専門科目においては有意な差が認められなかった（$M = 2.19$, $SD = 1.11$, $M = 2.96$, $SD = 1.82$, $t[87] = 1.63$, *n.s.*）。

しかし，大学共通科目においては有意な差が確認された（$M = 2.00$, $SD = 1.11$, $M = 2.72$, $SD = 1.45$, $t[82] = 2.00$, $p < .05$）。

名札掲示が自己の私語抑制に効果を示したのは大学共通科目だけで学科専門科目においては認められなかったということである。つまり，大学共通科目受講学生の中で名札をよく提示している学生は，その自己の名札提示行為によって自己の私語発生を抑止できていると思っているということである。

３．名札提示が他者の私語抑制意識に及ぼす効果

２．において名札提示が自己の私語抑制意識に及ぼす効果は一部検証されたわけであるが，次に他者の私語抑制意識に対する効果を

検証するために「あなたの周りの人は，名札を立てることによって授業中に私語をしなくなったと思いますか」という質問（７件法）の回答値に基づいて，名札提示低群と名札提示高群の間でt検定を行ったところ学科専門科目と大学共通科目の両者において有意な差が認められた。
（M = 2.13, SD = .96, M = 3.23, SD = 1.72, t[87] = 2.49, p < .05；M = 1.84, SD = .90, M = 2.66, SD = 1.43, t [82] = 2.36, p<.05）。

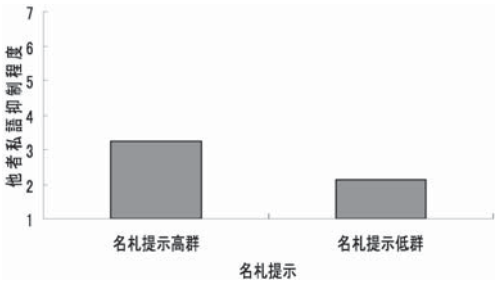

図１　他者私語抑制程度平均値（学科専門科目）

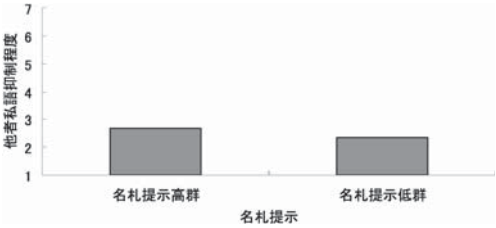

図２　他者私語抑制程度平均値（大学共通科目）

つまり，名札をよく提示している学生はそうでない学生に比べて，他の学生が名札を立てる行為によってその学生が自ら私語を抑制している可能性をより高く見積もっているということである。

４．自分より他人がうるさい

「この授業の私語はどの程度ありましたか」という設問（７件法）の平均値は専門科目で2.24（SD = 1.14）であり，大学共通科目では4.44（SD = 1.57）であった。一方，「あなたはこの授業中にどの程度私語をしていましたか」という設問の平均値は専門科目では1.55（SD = 0.93）であり，大学共通科目では2.93（SD = 1.53）であった。教室内での私語認知程度と自己の私語認知程度の間には，専門科目と大学共通科目いずれにおいても中程度の相関が認められた（r = .601, p<.001；r = .433, p<.001）。つまり自分が私語をしていると思っている学生ほど教室内の私語認知程度も高いということであるが，しかし，教室内私語認知程度と自己の私語認知程度の評定値の間で対応のあるt検定を行ったところ，専門科目においても大学共通科目においても有意な差が確認できた（t[91] = −7.14, p<.001；t[89] = −8.69, p<.001）。このことから自分より周囲の学生がよく私語をしていると学生たちは感じていることがわかる。

５．座席と私語発生の関係

教室の座席を前方廊下側，前方中央，前方窓側，後方廊下側，後方中央，後方窓側に６分割し，教室内でよく私語が発生していたと感じた場所について尋ねたところ，大学共通科目では，前方の３つのエリアを合計して６％で，専門科目では１％であった。つまり，私語はほとんど後方座席で発生していると多くの学生は感じているということである。

では，実際に私語を行っている学生はどこに座っているのであろうか。「あなたはこの授業中にどの程度私語をしましたか」という質問に対する回答値を用いて，エリアごとの比較を行った。

対応のないt検定の結果，専門科目では，前方中央の着席者（M = 1.22, SD = 0.49）とそれ以外のエリア着席者（M = 1.73, SD = 1.06）の間において有意な差がみられた（t[90] = −2.61, p<.05）。また，後方中央の着席者（M = 2.11, SD = 1.34）とそれ以外のエリア着席者（M = 1.31, SD = 0.53）の間においても有意な差がみられた（t[90] = 4.08, p<.001）。

また，大学共通科目においては同様のt検定の結果，前方中央の着席者（$M=1.88$, $SD=0.72$）とそれ以外のエリア着席者（$M=3.16$, $SD=1.56$）の間に有意な差がみられた（$t[88]=-3.21$, $p<.01$）。また，後方廊下側着席者（$M=3.70$, $SD=1.56$）とそれ以外のエリア着席者（$M=2.71$, $SD=1.46$）との間に有意な差がみられ（$t[88]=2.63$, $p<.01$），後方中央着席者（$M=3.52$, $SD=1.70$）とそれ以外のエリア着席者（$M=2.73$, $SD=1.42$）との間にも有意な差がみられ（$t[88]=2.19$, $p<.05$），後方窓側着席者（$M=3.88$, $SD=1.67$）とそれ以外のエリア着席者（$M=2.57$, $SD=1.31$）の間にも有意な差がみられた（$t[88]=3.93$, $p<.001$）。

これらの結果は，教室の前列中央に着席していた学生は，自分自身は授業中に私語はしていなかったと思っていることを示し，また，後方に着席していた学生は，自分自身は授業中によく私語をしていたと思っていることを示している。本結果は，教室後方の学生は「授業と無関係の私語」の頻度が比較的高い傾向を示すと報告した，出口（2005，2007）の研究結果とも符合している。

國吉（2004）は，後列に着席する学生の方が前列に着席する学生に比べ，授業への積極性が低いことを報告しており，北川（1999）は教卓に近い位置への着席を指向する学生は達成動機が高く，「教師への積極性と授業への積極性がともに高い」傾向を見出している。このような知見を応用して，濱は新入生の必修科目において名札を忘れてきた学生を前列に着席させ，厚紙を与え簡易名札を作成させることを根気よく繰り返し実践してきた。一般的に考えて，名札を忘れてくる学生は私語発生予備軍的な要素が強く，そのような学生をほぼ強制的に前列に着席させることによって，私語をさせない環境を作ると同時に，授業に対する積極的態度発生を期待したのである。統計的データはないもののそのように強制的に前列に着席させられた学生の小テストの回答を見る限り，この手法に一定の手ごたえを感じている。

まとめ

本研究では机上に名札を提示することが私語抑制や私語抑制意識におよぼす効果を明らかにした。名札の提示程度によって学生を名札提示高群と名札提示低群に２分し，両者の間で比較検証を行ったところ自分自身の私語発生においては有意な差がなかったが，私語抑制意識に対しては有意な差が認められた。とりわけ，名札提示高群の学生は名札を提示することで他の学生が自分の私語抑制を意識するようになると考える傾向を示した。このことは名札提示高群の学生は規範の成立を期待して自ら積極的に名札を提示している可能性も示唆していると考えられる。

謝辞

本研究の遂行にあたり，佐藤綾香氏の多大なる協力を得た。ここに記して謝意を表す。

引用文献

出口拓彦・吉田俊和（2003）．私語の頻度と規範意識および大学生活の目的との関連．*日本社会心理学第44回大会論文集，* pp. 178-179.

出口拓彦（2005）．私語に対する規範意識・集団規範の認知と頻度の関連：公的・私的自意識および座席位置に着目して．*藤女子大学紀要（第２部），* **43**, pp 13-18.

出口拓彦・吉田俊和（2005）．大学の授業における私語の頻度と規範意識・個人特性との関連：大学生活への適応という観点からの検討．*社会心理学研究，* **21**, pp160-169.

出口拓彦（2007）大学の授業における私語と視点取得・友人の数・座席位置の関連―「私語をすること」「私語をされること」の相違に着目して　*藤女子大学紀要（第２部），* **44**, pp.

45-51.
藤川美枝子・西山啓（1997）．大学教育の改善に対する考察（1）：学生の私語を中心として．*日本教育心理学会総会発表論文集，* **39**, p. 508.
岩淵千明・小牧一裕（1996）学生の授業に対する規範意識についての研究　*日本グループ・ダイナミックス学会　第44回大会発表論文集，* pp. 174-175.
北川歳昭（1999）．態度としての座席行動．*就実論叢*　**29**, pp.17-30.
國吉和子（2004）．大学生の座席行動と学習態度に関する研究．*沖縄大学地域研究所年報，* **8**, pp. 129-137
Peretti, P.O., Clark, D, & Johnson, P.（1984）. Affect of parental rejection on negative atention-seeking classroom behaviors. *Education* **104**, pp. 133-137.
島田博司（2002）．私語への教育指導―大学授業の生態誌２．*玉川大学出版部.*
新堀通也（1992）私語研究序説　*玉川大学出版部*
須藤廣（1996）．授業中の私語現象に関する社会的研究―私化現象としての私語．*北九州大学文学部紀要，人間関係学科，* **3**, pp. 29-45.
ト部敬康・佐々木薫（1999）授業中の私語に関する集団規範の調査研究―リターン．ポテンシャル．モデルの適応．*教育心理学研究，* **47**, pp. 283-292.
塚田静香・佐藤方哉（2006）大学での講義におけるクラスルームマネージメント―私語の減少を中心に―．*日本行動分析学会第24回年次大会，* p. 122.